

# 図書館資料展示（4月～7月）池袋図書館

## ＜斎藤茂吉『源実朝』草稿及び資料＞

源実朝（みなもとのさねとも 1192-1219）は鎌倉幕府第三代将軍ですが、歌人としてもよく知られています。京の文化にあこがれ、和歌は14歳ごろから始めて歌壇の権威である藤原定家の門下となり、当時完成したばかりの『新古今和歌集』の影響を受けました。実朝は不幸にして28歳で暗殺され短い生涯を閉じましたが、晩年の万葉調の和歌は、近世の賀茂真淵や近代の正岡子規等に高く評価され、和歌史上大きな影響を残しています。唯一の著作である『金槐和歌集（鎌倉右大臣家集）』には700余首が編まれています。

斎藤茂吉は（さいとう・もきち 1882-1953）は山形県生まれの歌人で、14歳のときに親戚の医師に招かれて上京、精神科医になるため東京大学に学びながら、正岡子規の影響を受けて歌人を志しました。1913年歌集『赤光』を出版して注目を浴び、1921年には歌集『あらたま』を出版しました。また、源実朝の和歌を高く評価した歌人のひとりです。

立教大学図書館では2013年度に特別図書予算で、斎藤茂吉が1943年に出版した『源実朝』の自筆原稿と関連資料を購入しました。執筆原稿のほか、茂吉が所蔵していた『金槐和歌集』の和装本、刊行された初版本などを展示いたします。

立教大学図書館

### ＜展示資料＞

1. 『源実朝』手稿 / 斎藤茂吉 4部 ; 28cm

自筆原稿（一部引用部の印刷物切抜きあり）

[1] 38-258: 東撰和歌六帖, 六孫王神社藏實朝詠草, 實朝作歌實数, 「あはれなるかなや」, 「二心わがあらめやも」に就て, 定家所贈の萬葉集と實朝, 果して新古今風に墮したか, 實朝の歌七十講.

[2] 259-590: 金槐集の發育史的調査.

[3] 591-639: 金槐集の傳本.

[4] 640-749: 實朝雜纂

四百字詰原稿用紙（一部二百字詰原稿用紙）、校正紙、図版切貼あり

2. 『金槐集私鈔』 / 斎藤茂吉著（アララギ叢書；第26編）東京：春陽堂 1926.4

※『源実朝』の旧著、『源実朝』はその後の小論を合わせて整理し執筆された。

3. 『源実朝』 / 斎藤茂吉著 東京：岩波書店 1943.11（※斎藤茂吉旧蔵本）

4. 斎藤茂吉旧蔵「金槐和歌集」和装本コレクション（19点）

5. 『右大臣實朝』 / 太宰治著 大阪：錦城出版社 昭和18年  
（名著初版本複製 太宰治文学館 1992）



# 斎藤茂吉『源実朝』草稿及び資料について

文学部文学科日本文学専修 教授 加藤睦

展示資料の『源実朝』草稿及び資料とは、近代アララギ派歌人の斎藤茂吉が著した論考『源実朝』（岩波書店、1943）の自筆草稿、および茂吉が実朝研究の資料として用いた斎藤家旧蔵の版本等 19 点である。

鎌倉幕府三代将軍として知られる源実朝であるが、近世中期に賀茂真淵によって万葉調歌人として顕彰されて以来、正岡子規や斎藤茂吉といった近代歌人に至るまで、歌人としても極めて高い評価がなされてきた。茂吉は、岩波文庫版『金槐和歌集』校訂に携わり、また『金槐集私鈔』（春陽堂、1926）や前記『源実朝』を著すなど、実朝顕彰に情熱を注いだことに加え、詠歌にも『金槐和歌集』所収歌を踏まえたものが見出せるなど、茂吉と『金槐和歌集』の関係は一層検討されてしかるべきであろう。



『源実朝』の草稿は、茂吉の自筆資料であり、資料的価値の高さは言を俟たない。また、草稿に施された茂吉自身による夥しい訂正からは、推敲の様相を窺うことができ、雑誌連載稿との比較と併せて、改稿過程や茂吉の関心の在処を探る端緒ともなろう。一方、近時写本を中心とした資料が鶴見大学図書館に入り、日の目を見ることとなった『金槐和歌集』の斎藤家旧蔵書群だが、このたび購入を申請する板本等 19 点は、そのツレともいえるべく、茂吉の実朝研究の全貌を明らかにするうえで欠くことのできない資料である。その多くは、近世中後期に広く流布し、現在 70 点以上の伝本が確認できる真淵評注本系統『金槐和歌集』（真淵の書入や真淵が秀歌に記した丸印を有する系統の本）であり、茂吉の実朝研究の検討に資するのみならず、近世中後期における実朝評価を窺ううえでも、また真淵学の受容を考えるうえでも、斎藤家旧蔵書群は実に有益である。このように、『源実朝』草稿と斎藤家旧蔵の『金槐和歌集』諸本は、①茂吉研究や近代短歌の研究に資するのみならず、②源実朝や『金槐和歌集』の受容史を考えるうえでも、③真淵の実朝研究とその近世中後期から近代に至る伝播の様相を探るうえでも、貴重な情報源である。



# 斎藤茂吉旧蔵「金槐和歌集」和装本コレクション

1. 金槐和歌集 / [源実朝著]; 源實朝公七百年祭協賛會 [編] 東京 : 源實朝公七百年祭協賛會 1919.3 登録番号:52269598
2. 鎌倉右大臣家集 : 全 / [源実朝著]; 賀茂真淵評註 ; 佐佐木信綱校訂 ; 村田丹陵作畫 東京 : すみや書店 1907.9 登録番号 : 52269599 ※茂吉蔵書印有り
3. 鎌倉右大臣家集 : 全 / [源実朝著]; 賀茂真淵評註 ; 佐佐木信綱校訂 ; 村田丹陵作畫 東京 : すみや書店 1907.9 登録番号 : 52269600 ※斎藤茂吉手沢本、三宅本校合書入
4. 鎌倉右大臣家集 : 全 / [源実朝著]; 賀茂真淵評註 ; 佐佐木信綱校訂 ; 村田丹陵作畫 東京 : すみや書店 1907.9 登録番号 : 52270015 ※「童馬山房」印有
5. 金槐和歌集 / 鎌倉右大臣実朝公 [詠] [京] : 北村四郎兵衛 貞享 4 [1687] 3冊 登録番号 : 52270016 - 52270018 ※「茂吉蔵書」印ほか有
6. 金槐和歌集 / 鎌倉右大臣実朝公 [詠] [京] : 北村四郎兵衛 貞享 4 [1687] 3冊 登録番号 : 52270019 - 52270021 ※足立正聲旧蔵本
7. 金槐和歌集 / 鎌倉右大臣実朝公 [詠] [京] : 北村四郎兵衛 貞享 4 [1687] 3冊 登録番号 : 52270022 - 52270024 ※内山真龍旧蔵本
8. 金槐和歌集 / 鎌倉右大臣実朝公 [詠] 京都 : 河内屋藤四郎 [出版年不明] 登録番号 : 52270025 - 52270027 ※群書類従本校合書入本
9. 金槐和歌集 / 鎌倉右大臣実朝公 [詠] [京] : 北村四郎兵衛 貞享 4 [1687] 登録番号 : 52270028 ※朱墨の書き入れあり
10. 金槐集 : 鎌倉右大臣家集 : 訂正増評 / [源実朝著]; 加茂真淵點評 ; 森與重編輯 東京 : 森與重 1899.5 登録番号 : 52270029
11. 金槐集 : 鎌倉右大臣家集 : 訂正増評 / [源実朝著]; 加茂真淵點評 ; 森與重編輯 東京 : 森與重 1899.5 登録番号 : 52270030
12. 金槐和歌集 / 鎌倉右大臣実朝公 [詠] 京都 : 河内屋藤四郎 江戸 : 丁子屋平兵衛 [他] [出版年不明] 登録番号 : 52270031
13. 金槐和歌集 / 鎌倉右大臣実朝公 [詠] 寺町 [京都] : 大森太右衛門 貞享 4 [1687] 登録番号 : 52270032
14. 金槐和歌集 / 鎌倉右大臣実朝公 [詠] [京] : 北村四郎兵衛 貞享 4 [1687] 登録番号 : 52270033 ※墨と朱墨の書き入れあり
15. 金槐和歌集 / 鎌倉右大臣実朝公 [詠] [書写地不明] : [書写者不明] [書写年不明] 登録番号 : 52270034 ※写本
16. 金槐和歌集 / 鎌倉右大臣実朝公 [詠] [書写地不明] : [書写者不明] [書写年不明] 登録番号 : 52270035
17. 頼政家集 [書写地不明] : [書写者不明] 文化 13 [1816] 登録番号 : 52270036 ※写本
18. 金槐集 / 鎌倉右大臣實朝 [詠] [書写地不明] : 藤森りつ子 [写] 1931.2 登録番号 : 52270037 ※写本
19. 金槐集 / 鎌倉右大臣實朝 [詠] [書写地不明] : 藤森りつ子 [写] 1931.1 登録番号 : 52270038 ※写本

## 参考文献：「源実朝」についての論考（抜粋）

### ① 正岡子規著『歌よみに与ふる書』岩波文庫 1983年改版より（初版1955年）

※初出：雑誌『日本』明治31年2月12日～3月4日に連載

#### ・「歌よみに与ふる書」

”仰<sup>おおせ</sup>せの如く近来和歌は一向に振ひ不<sup>もうさず</sup>申候。正直に申し候へば万葉以来<sup>さねとち</sup>実朝以来一向に振ひ不申候。実朝といふ人は三十にも足らで、いざこれからとういふ処にてあへなき最期を遂げられ誠に残念致し候。あの人をして今十年も活かして置いたならどんなに名歌を沢山残したかも知れ不申候。”

#### ・「八たび歌よみに与ふる書」

” 武士の矢並つくろふ小手上に<sup>あられ</sup>霰<sup>ものふ</sup>たばしる那須の篠原

この歌の趣味は誰しも面白しと思ふべく、またかくの如き趣向が和歌には極めて珍しき事も知らぬ者はあるまじく、またこの歌が強き歌なる事も分りをり候へども、この種の句法が殆どこの歌に限るほどの特色を為しをるとは知らぬ人ぞ多く候べき。普通に歌はなり、けり、らん、かな、けれ<sup>など</sup>杯の如き助辞を以て<sup>あつせん</sup>斡旋せらるるにて名詞の少きが常なるに、この歌に限りては名詞極めて多く、「てにをは」は「の」の字三、「に」の字一、二個の動詞も現在になり（動詞の<sup>もつとも</sup>最短<sup>もつとも</sup>き形）をり候。・・・



### ② 斎藤茂吉校訂『金槐和歌集』岩波文庫 1963年改版 解説より（初版1929年）

”金槐集は、一に金槐和歌集、鎌倉右大臣歌集といい、鎌倉三代将軍<sup>さねとち</sup>実朝の家集である。金は鎌倉の鎌の偏を取り、槐<sup>かい</sup>は、面<sup>か</sup>槐<sup>かい</sup>三公位焉などといって大臣の意味になるから、金槐集は鎌倉右大臣歌集ということになるのである。

金槐集の流布本には、貞<sup>じょう</sup>享<sup>きやう</sup>四年刊行の三冊本（貞享本）と群書類従巻二三二所収のもの（類従本）の二とおりあって、語句、順序、歌に多少の差がある。そのほか一二の写本があるが、いずれかの系統に属するものと<sup>みな</sup>見做<sup>みな</sup>していい。・・・

実朝は建久三年八月九日に生れ、十二歳のとき、兄の頼家の後を襲うて鎌倉三代将軍になった。建保六年、実朝二十七歳にして右大臣に任ぜられ、翌、建保7年正月二十七日、<sup>つるがおか</sup>鶴岳八幡に拝賀した歸に、公<sup>く</sup>暁<sup>ぎやう</sup>（※実朝の甥にあたる）のために殺された。すなわち、実朝は二十八歳の正月に歿したのである。・・・

そこで、実朝は、新古今集を読み、古今集を読み、藤原定家の教を受けながら、万葉集を得て、これらの家集から多くの影響を受け、その歌を本歌として本歌取<sup>ほんかどり</sup>の歌を盛に作っている。その間に実朝独自の歌境を表出しているが、実はいまだ初途にあつたものと<sup>みな</sup>見做<sup>みな</sup>すべきである。つまり、実朝は歌人としてもいまだ初途にあつて、殺されたと謂うべきである。・・・



③ 小林秀雄『実朝』（『モーツァルト・無常という事』新潮文庫 2006年改版より）

初出：「文學界」昭和18年2月号

“芭蕉は、弟子の<sup>ぼくせつ</sup>木節に、「中節の歌人は誰なるや」と問われ、言下に「西行と鎌倉右大臣ならん」と答えたそうである（『俳諧一葉集』）。言うまでもなく、これは、有名な<sup>まぶち</sup>真淵の実朝発見より余程古い事である。それだけの話と云って<sup>しま</sup>了えば、それまでだが、僕には、何か<sup>そこ</sup>其処に万葉流の大歌人という様な考えに<sup>わずら</sup>煩わされぬ純粹な芭蕉の鑑識が光っている様に感じられ、興味ある伝説と思う。必<sup>きつと</sup>度、本当にそう言ったのであろう。僕等は西行と実朝とをまるで違った歌人の様に考え勝ちだが、実は非常によく似たところのある詩魂なのである。



（中略）

箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄るみゆ

この<sup>いわゆる</sup>所謂万葉調と言われる彼の有名な歌を、僕は大変悲しい歌と読む。実朝研究家達は、この歌が二所詣（※伊豆権現と箱根権現の参詣）の途次、詠まれたものと推定している。恐らく推定は正しいであろう。彼が箱根権現に何を祈ってきた帰りののか。僕には<sup>ことばがき</sup>詞書にさえ、彼の孤独が感じられる。悲しい心には、歌は悲しい調べを伝えるのだろうか。・・・”

④ 吉本隆明著『源実朝』日本詩人選12 筑摩書房 1971より

“箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄るみゆ  
大海の磯もとゞろによする波われてくだけて裂けて散るかも  
玉くしげ箱根の海はけゝれあれや二山にかけて何かたゆたふ  
旅をゆきし跡の宿守をれをれにわたくしあれや今朝はいまだ来ぬ  
わたつ海のなかに向かひて<sup>いづ</sup>出る湯の伊豆のお山とむべもいひけり

いずれも実朝の最高の作品と云ってよい。また真淵のように表面的に『万葉』調と云っても嘘ではないかもしれない。しかし、わたしには途方もない二ヒリズムの歌とうけとれる。悲しみも哀れも<心>を叙する心もない。ただ眼前の風景を<事実>としてうけとり、そこにそういう光景があり、また由緒があり、感懐があるから、それを<事実>として詠むだけだというような無感情の貌がみえるようにおもわれる。

（中略）

ものゝふの矢並つころふ<sup>こて</sup>籠手の上に<sup>あられ</sup>霰たばしる那須の篠原

「ものゝふの矢並つころふ」は真淵もあげ、子規も引用している周知の歌だが、かれらのいうこの万葉調の力強い歌は、けっしてそうはできていない。名目だけとはいえ征夷将軍であったものが、配下の武士たちの合戦の演習を写実した歌とみても、そういう情景の想像歌としてみても、あまりに無関心が<事実>を叙している歌にしかなくなっている。冷静に武士たちの演習を眺めている将軍を、もうひとりの将軍が視ているとでもいうべきか。・・・

